

六番目の謎の男？

「百万石」4号 懸賞問題に答へ

幕下付出し 篤屯山

ある数学者が神の存在を証明したとある日、デイドロはこんな知らせをうけ、この問題についての公開論争に招待された。その数学者というのは当時世界一といわれていたレオンハルト・オイラーであった。多くの聴衆が居並ぶ中でオイラーは、いとまげな口調で「 $\frac{0+0}{0} = x$ 、故に神あり返答せよ！」と、いつてデイドロに戦いを挑んで来た。代数はデイドロにとってまったく苦手な分野だったので、彼はたちまち返答に窮してしまっただ。

オ6号
1979.4.8
印刷

これはL.ボグベンの歴史的名著「百万人の数学」の冒頭にある逸話です。(百万石の数学ではありません)。さらにボグベンは「現代のデイドロは自衛のために『大きさの言葉』(=数学)を学ばねばならない。……今日、経済的独裁者のもっとも有力な友人は計算の天才である。数学(すなわち、大きさの順序の文法!)の知識がなくては、われわれは万人が苦勞からまぬかれ、その上ひとりも貧乏人がいない合理的な社会を設計することはできない」といっています。

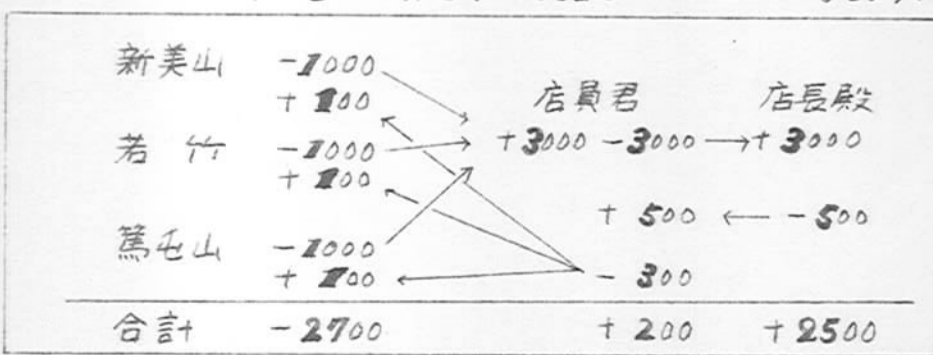
前置きが長くなりすぎました。例の「百万石」の懸賞問題。ここには、5人の登場人物がいます。長巻きフィルムを買いに来た3人。(新美山、若竹、篤屯山としましょう)それにカメラ店員と店長、計5人です。さてセニの問題は、セニの電力きをつぶさに観察しなければなりません。そのために、先ずひとりひとりの財布を覗いてみることにしましょう。

若竹は赤い酒落れた西陣織りの財布。篤屯山は汚れて黒んでいるがもとは青かった財布。新美山は財布が無いのでジパンの尻のポケットです。3人はそれぞれの財布乃至ポケットから千円札を取り出します。その千円札を店員が受け取り、店長に手渡す。もちろんわが店員君は、棚から期限のたっぷりあるトライXを3人に渡します。さて次に店長殿は、店員君から受け取った3枚の千円札をレジにしまい、代わりに五百円札を店員君に手渡します。店員君はちょっと用事ができたような振りをして物かけにかけ、例の五百円札をポケットにしまい、かわりに彼の黒いビニールの小銭入れから百円玉を3枚とり出し、なに喰わぬ顔で、新美山、若竹、篤屯山に渡すわけです。なにもしらない3人は「しめしめ儲かったわい。」と喜ぶ男んで、喫茶「詩」へ直行します。

きっとすごく得をしたような気がして、いつものブレンドコーヒーの代りに「詩」のミツチャン自慢のモカ乃至はブルーマウンテンあたりを注文するに違いありません。(あーあ貧乏人とはいつもこんなものだ。)これで一件落着です。

「エッ? これでは答になっていない?」

それじゃあ、今の悲しい貧乏人の物語を図式化してみましょう。

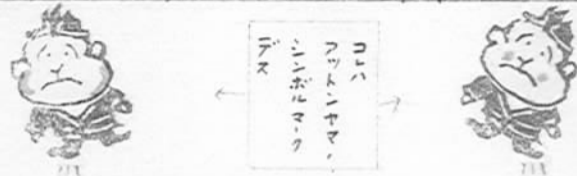


ここで注意しておかなければならないことがあります。それは「定価」というのは、セニの計算には、なんら関係していないということです。定価あるいは標準価格、ときにはメーカー希望価格などということもありますが、それは、その名の通り、あくまでも希望であり、願望であり、つまりは虚の価格なのです。

たとえば僕らは定価3000円の品を1980円で買うという経験をよくします。この時3000円という定価は、実は「定まった価格」などではなく、むしろ「定まらない価格」、つまり「不足価」なのです。

この3000円という数字は、計算のためにあるのではなく、心理的な効果を引き起こすための単なる記号にしかすぎません。「明日のメカニズム……」とか「未来をさき取りする……」などという新製品の購買欲をそそるためのふれこみと変わるものではありません。

結論を急ぎましょう。「百万石の数学」の懸賞問題の一般的な解答は、先にあげた図で明瞭です。セニカンジョウは我が三重支部の得意とするところ。払った金は3人で2700円、受けとったのは店員君が200円、店長殿が2500円、計2900円でピッタリです。



しかしこれでは小学生の算数の解答にしかなりません。我が「百万石の数学」はそんな幼稚な解答では、決してコーヒーを奮発するわけがありません。この懸賞問題は「はて、残りの100円は、何処へ?」と更に新たな問題を提起しているのです。正にこの問題のテーマはここにあります。

僕らは最初、登場人物を5人としました。しかし5人と信じている間は、永久にこの謎は解けないのです。受け句の果ては、「問題の立てかたが悪いのだ」と自分の頭の悪さを、この問題の方に転嫁しようとしてしまいます。その言い分を回解してみましよう。

$$3000 - (2700 + 200) = 100$$

↑ ↑ ↑
定価 この計算は

これは3人が最初に出した3000円ではない。何故なら次の2700円の意味がなくなる(定価は不足価)

(2700-200)である。何故なら店員の取った200円は、3人の支払った2700円のうちに含まれていたものだから。即ち 2700-200=2500
3人の支払い - 店員の取り分 = 店長の受取り分

つまりこの数式は、不定の数値から誤った計算によって得られた数値を引くという、2重の誤りをしている。——というわけだ。これで「百万石の数学」はコーヒーを出すでしようか。「否」であります。「百万石の数学」はベクトル解析も複素解析をも越えた超高等数学を要求します。僕らは最初に5人とした登場人物の他に、更に6人目の謎の人物の正体を明らかにしなければなりません。この人物こそあの「残りの100円」を「何処か」へ持ち去った強本人だからです。

6人目の謎の人物?

それは3000円という定価をつけたフィルムメーカーだったのです。3000円という虚の数値を、あたかも計算上の数値に見せかけて合法的な取戻をはたらくふとどきな大メーカーです。わが店員君のかすめとった金は、たかが200円。インバーゲンゲームをやれば、多分5分でなくなってしまうでしょう。そのうえ、きつとこのことかばしてしまい、店長どのに大目玉を喰らうにちがいありません。幸いこの3人のJRPのお客様は良い人ばかりなので、後日このことでイチャモンをつけるようなことはありません。

それに反してこのふとどきな大メーカーは、すべての店すべての客から例外なしに「残りの100円」を合法的にかすめとるので、そうしてその罪状は決してバシるようなことはありません。だからからも大目玉などを喰うこともないのです。

仮に解答 — 残りの100円はフィルムメーカーが詐取せるものなり。